

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 12 月 26 日現在

機関番号：46101

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011 ～ 2012

課題番号：23700867

研究課題名（和文） 「父親」をめぐる育児に関する意識の形成・変容に関する研究

研究課題名（英文） Studies on the formation and transformation of consciousness about child care over the "father"

研究代表者

山瀬 範子（YAMASE NORIKO）

四国大学短期大学部・幼児教育保育科・講師

研究者番号：00455057

研究成果の概要（和文）：本研究では、育児観を明らかにする上での分析の対象として「父親の育児参加」を取り上げる。父親の育児については、育児行為の見直しや育児観の再検討といった作業はあまり行われていない。そこで、本研究では、父親の育児行為の具体的内容についての定義を試み、育児観の形成過程を明らかにすることを目的とした。育児雑誌・育児書を基にした分析の結果、父親の独自性を強調した関わりが「父親の育児行為」として捉えられる傾向があることが明らかとなった。また、その中で、育児とは「楽しむこと」や「父親の自己の成長の機会であること」が強調されていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）： In this paper, I address the "father of the child care participation" as an object of analysis in clear view on the child care. For child care of father, tasks such as re-examination of child care and sense of review of child care act is not performed much. Therefore, in this study, I aimed that trying to define for the specific contents of the child care act of father, and to clarify the formation process of childcare view. The results of the analysis that is based on the parenting magazine, baby book, that there is a tendency to be regarded as the "father of the child care act" are involved that emphasized the uniqueness of father revealed. Further, it therein, "It is an opportunity for personal growth father" and to "the fun" is highlighted and childcare revealed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	300,000	90,000	390,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：保育・子育て、父親の育児参加

1. 研究開始当初の背景

『新社会学辞典』によれば、育児とは「未熟な状態で生まれた人間の子どもを、保護し養育する営み」と定義される。しかし、実際、育児という言葉を用いるとき、そこには社会・文化的に様々な意味づけがなされる。本

研究ではこのような育児に関する価値意識を育児観と定義する。人々が育児を行うとき、その行動は育児観に基づいて決定され、また、人々が育児について論じるとき、その主張はその人の育児観に基づいている。すなわち、育児観は育児をめぐる行動や発言をその背

後から規定しているのである。したがって、育児観を明らかにすることは、育児に関する行動や発言を読み解く上で欠かせないものとなる。

本研究では、育児観を明らかにする上での分析の対象として「父親の育児参加」を取り上げる。研究代表者は、国会会議録分析を通じた法律の中の子ども観に関する研究や乳幼児を持つ父母を対象とした調査を基にした育児に関する価値意識研究を行ってきた。この中から、社会の変化によって急激に役割内容の変容が生じている<父親>に対して付与される価値の分析を通して、育児に関する意識を分析する視点を得た。父親は、性別役割分業の下、育児に関する役割から免除されてきたが、近年、父親に対して育児参加が求められている。この役割内容の変容は、育児という行為に付与される価値、つまり育児観を見直す契機となりうる。しかし、先行研究においては、父親の育児については、母親の育児行為＝父親の育児行為という指標が検討されることなく用いられていることから明らかなように、育児行為の見直しや育児観の再検討といった作業は見過ごされてきた。つまり、父親に求められた「労働に専従しつつ、育児にも関わる(＝働く親)」という新しい形の役割の具体的内容は看過されているのだ。

2. 研究の目的

上述の問題意識に基づき、本研究では、①父親の育児行為の具体的内容と付与される価値意識に関する実証的研究、②育児観の形成・変容過程に関する実証的な研究、③価値意識に関する研究としての理論化の試み、といった研究全体の構想をもっている。今回の申請においては、2年間の研究期間をもって、①および②に焦点を当てた。

(1)父親の育児行為の具体的内容と付与される価値の解明

父親の育児参加とはどのような行為をさすのだろうか。父親の役割については、父親独自の役割を重視する言説、父親も母親と同じ役割を行うべきとする言説が混在・錯綜した状況がある。その上で、それぞれの立場から、父親の育児参加についての議論が行われているのであるが、この議論の根本を支えるはずの父親の役割については、明確に規定しようとした研究はない。例えば、父親の育児参加をめぐる研究の草分け的存在である牧野らの研究においては、父親の育児参加とは、主に母親の育児行為を踏襲した内容となっており(牧野ほか 1996)、その後続く研究においても、同様の指標が用いられていく。このように、議論の根本となるはずの父親の育児行為そのものについての検討が行われ

ていない。ゆえに、本研究では、父親の育児行為の具体的内容についての定義を試みるのである。

(2) 育児観の形成・変容過程の解明

目的①において定義された父親の育児行為を基に、育児観の形成・変容過程の分析を試みることで、育児観の形成過程、また、急激な社会変動の中での意識の変容過程を明らかにしていく。育児に関する知識・技術は、公教育において教授されるのではなく、家族の中で、主に娘たちに伝承されることによって世代間伝達されてきた。育児観についても、まずは定位家族の中で形成されるといえるだろう。それは、また、子どもを持つことで生殖家族の中で変容していく。このような育児に関する知識・技術の伝達については、主に母親に関する研究の中で行われ、教育学、家族社会学、ジェンダー論の分野において、多くの研究の蓄積がある。しかし、父親に関して、特にその育児行為の学習・育児観の形成に特化するならば、実証的な研究の蓄積はまだ十分には行われていない。

近年になって父親の育児参加が求められるという社会的な変化が起こった。この点も育児観の変容に影響を与えるだろう。しかし、男性には育児に関する知識・技術が欠如している上に、学習の機会も失われている(渡邊 1996)。経済的役割とともに育児に関する役割を担うことになった父親がどのような育児観を形成・変容していくのだろうか。

<参考文献>

- 牧野カツコほか編著 1996『子どもの発達と父親の役割』ミネルヴァ書房
松田茂樹 2002「父親の育児参加促進策の方向性」国立社会保障・人口問題研究所編『少子社会の子育て支援』東京大学出版会、313-330頁
渡邊秀樹 1996「父親の育児不安—シングルファーザーの問題に焦点をあてて」『現代のエスプリ』No.342、165-171頁

3. 研究の方法

(1) 分析の枠組み

育児行為と育児意識は、日常的なレベルから国家、行政、市場等の社会構造的レベルまでを通じたトータルな分析枠組みでもって捉える必要がある(天童 2004)。したがって、父親の育児行為を定義する上で、全体社会のもつ意識と個人のもつ意識の、マクロ・ミクロの両方のレベルから捉えていく必要がある。本研究の2年間においては、育児雑誌・育児書の分析を行い、乳幼児の父母を中心に共有される育児観とその伝達の過程の解明に焦点を当てた。

出版数の多い育児雑誌や育児書を基に、父

親に期待される育児行為に関する内容を明らかにしていく。育児雑誌・育児書は、育児期の父母に対して価値意識の変容を働きかける媒体であり、全体社会の持つ価値を個人に伝達する役割を担っている。従って、全体社会と個人とを繋ぐ仲介者としても育児雑誌・育児書に関する分析を行なった。

(2)対象とした資料

①育児雑誌

2011年4月から2012年3月末までに発行された『bizmom』（ベネッセコーポレーション発行）と『FQ JAPAN』（アクセスインターナショナル発行）を分析の対象として取り上げる。この2誌を取り上げるのは、創刊時期が近く、また、どちらも季刊であるため、情報が比較しやすいことによる。また、両誌ともHPを通した読者との交流・情報提供を行っており、読者の意識が紙面構成に反映されやすいと考えられる。ほぼ同じ年齢層の子どもを持つ親を対象とした育児雑誌であるが、『bizmom』は母親を、『FQ JAPAN』は父親を読者としている。両誌を取り上げることで、女性から見た＜父親＞と男性から見た＜父親＞の違いにも着目することができるため、この2誌を中心に分析を行った。

②育児書

過去30年間において発行された『出版年鑑』を基に「育児」の分野に分類されたものを抽出し、さらに、その中から「父」・「パパ」・「ツレ」等「男性」を示す言葉をタイトルに含む書籍を抽出してまとめたところ、育児書の発行数は増加傾向にあること、その一方、法律の制定や社会の動き等の変化にかかわらず、男性を読者層に想定したり、男性と子どもの関わりを取り扱った育児書はほぼ一定の冊数が発行されていることが明らかとなった。また、男性と子どもの関わりを取り扱った育児書は、そのタイトルから①育児の体験をまとめたもの、②知識を啓蒙するタイプのものに大別することができ、①のタイプの数が多いことがわかる。本研究では、知識の広がりを見るために、②のように知識の啓蒙を目的とする育児書を分析の対象として取り上げることとする。具体的には、次の9冊を分析の対象として取り上げる。

- ・男の子育てを考える会編『男の育児書』（1987年版、1995年改訂版）
- ・今田義夫・貝嶋弘恒『はじめてパパになる本—父親のための育児手帖』（1995年版、2008年増補改訂版）
- ・汐見稔幸ほか『父子手帖』（1994年、1999年Part2乳幼児）
- ・NPO法人ファザーリング・ジャパン編『子育てパパ検定』（2007年）
- ・明橋大二『忙しいパパのための子育てハッピーアドバイス』（2007年）

- ・安藤哲也・小崎恭弘『パパルール』（2009年）

これらの9冊は、改訂が行われているもの、複数の版を重ねて発行されているもの、続編が出版されたものであり、一定数の読者を獲得したと考えられることに基づいて選定を行った。

<参考文献>

天童睦子編 2004『育児戦略の社会学—育児雑誌の変容と再生産—』世界思想社

4. 研究成果

(1)育児雑誌の分析から

育児雑誌を基にした分析から、次のような＜父親＞像を捉えることができた。

- 父親の独自性；遊び方、世話の仕方等、母親と同じように行うとしても、関わり方が独自であること。父親にしかできないことがある。
- 補助的役割としての父親；母親の働きかけを通して育児に関わるようになる。
- 母親との関係、母親の環境を整える；夫婦関係が良好であるように、また、母親が落ち着いて生活できる環境を作ることも父親の役割に含まれている。
- 育児経験による変化；育児は父親の成長の機会。育児経験は仕事に役に立つ。育児の楽しさ。

(2)育児書の分析から

＜父親＞に対して求められる役割は、子どもに関わること（世話をする、遊ぶ、しつけなど）だけでなく、母親を支えること、特に精神的に支えることが重視されていた。子どもと関わることで求められた時期から、子どもと関わるだけでなく、母親を精神的にサポートすることが父親に求められるようになったことが分かる。また、近年発行された育児書では、父親が「育児を楽しむこと」、「育児を通して成長すること」が強調されていた。また、世話や遊びといった子どもとの関わり、母親を精神的に支えるといった役割はどの育児書でも共通してみられた。

社会の変化とともに変化した点としては、「子どもとの関わり方が分からなくて悩む」「子どもと関わる時間を確保するために苦慮する」父親から、近年、「母親と一緒に悩んだり、楽しんだり、共感したりする父親」「育児を楽しむ父親」「育児を通して成長する父親」といった父親像への変化がみられた。育児の大変さ・つらさに共感を示す一方、楽しみや成長を強調している。

近年、発行されている育児書は、イラストや漫画を活用したり、平易な文章で読者の共

感を得やすいスタイルで執筆されたものが多い。対象となる年齢層に幅が見られたが、他にも、広範な読者を獲得していると考えられる。

(3) 結論と今後の展望

① 結論

本研究では、育児雑誌・育児書を基に〈父親〉に求められる育児行為を明らかにした上で、それらがどのように育児期の父母に伝達されていくのかを明らかとした。

先行研究においては、父親の育児＝母親が子どもとの関わりのなかで行っていることをどの程度分担できているかといった視点から捉えられがちであったが、本研究の成果から、〈父親〉の独自性を持った関わりが「父親の育児行為」として捉えられる傾向があることが明らかとなった。また、その中で、育児とは「楽しむこと」や「父親の自己の成長の機会であること」が強調されていることが明らかとなった。

② 今後の展望

研究の目的にて述べたように、研究代表者は、①父親の育児行為の具体的内容と付与される価値意識に関する実証的研究、②育児観の形成・変容過程に関する実証的な研究、③価値意識に関する研究としての理論化の試み、といった研究全体の構想をもっている。本研究にて明らかとなったのは、主に①・②に関する部分である。③に関しては、父親と対置概念である母親に対しても分析を行った上で着手していきたいと考えている。育児行為・育児観を検討し、③に結実させるためには、父親だけに着目するのではなく、母親にも着目する必要があるからである。これに関しては、今後の課題としたい。

また、育児雑誌や育児書が、どのように受け止められているのか、どのように活用されているのか、個人レベルでの受容過程もあわせて検討していく必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 山瀬 範子、「育児書にみる〈父親〉像」、『四国大学紀要人文・社会科学編』第 39 号、2013 年、pp. 63 - 71 (査読無)
- ② 山瀬 範子、「育児雑誌にみる〈父親〉像」、『発達社会学研究』第 4 号、2012 年、pp. 65 - 72 (査読無)

[学会発表] (計 2 件)

- ① 山瀬 範子、「育児書にみる〈父親〉像」、日本教育社会学会第 64 回大会、2012 年 10 月 27 日、同志社大学(新町キャンパス)
- ② 山瀬 範子、「育児雑誌にみる〈父親〉像」、日本子ども社会学会第 19 回大会、2012 年 7 月 1 日、國學院大學(横浜たまプラーザキャンパス)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山瀬 範子 (YAMASE NORIKO)

四国大学短期大学部・幼児教育保育科・講師

研究者番号：00455057